

# 台灣原住民研究

第 20 号

## [論文]

伊能嘉矩の原住民族分類における諸種の資料源	笠原政治	5
プユマにおける異類婚姻譚とその一つの起源論	蛸島 直	28

## [特別企画] 科研費成果報告

主旨説明	角南聰一郎	72
日本国内の台湾原住民族資料の概要	角南聰一郎	75
松本民芸館所蔵の台湾原住民族資料	山田仁史	90
日本国内所在の台湾原住民族資料の材質調査	山田卓司	99
コメント	林志興／笠原政治／野林厚志	112

## [資料と解説]

ロシアの台湾原住民族研究を概観する	塙本善也	124
台湾高砂族タイヤル族セーダッカ支族慣習	坂本磯次郎（著）・山田仁史（解説）	135

## [20号を記念して]

20年を迎えた『台湾原住民研究』	清水 純	161
台日原住民族研究論壇（フォーラム）の8年	笠原政治	166
順益台湾原住民博物館	野林厚志	172
「台湾原住民研究会」発足と本誌創刊の前後	末成道男	175

## [報告]

[追悼文：宋文薰先生・楊南郡先生]

[書評] [彙報] [総目次] [執筆者別索引]

台湾原住民研究第 20 号  
2016 年 11 月 20 日

## 追悼・宋文薰先生

### 序

2016 年 4 月 27 日、台湾を代表する考古学者、宋文薰先生が 91 歳で逝去された。先生は台湾考古学界の重鎮であり、原住民研究にも造詣が深く、私たち日本の原住民研究者との付き合いも長かった。宋先生は、日本留学を経て台湾大学歴史学科に進まれたのち、国分直一、李濟等の教授の熏陶を受けて考古学へと転じ、1951 年に台湾大学考古人類学系の助手となられてから 1994 年に教授職を退官されるまで、台湾大学において長く教育と研究に携わってこられた。その間、台湾各地で発掘調査を進められ、台湾考古学の確立に貢献された。

戦後、特に 1960 年代以降、日本から台湾を訪れる新しい世代の研究者たちは、日本語の極めて堪能な宋文薰先生との付き合いを通じて、考古学はもちろんのこと、幅広い分野においてさまざまなご教示をいただきいた。先生の豊かなフィールド経験と深い見識は、台湾を研究しようとする私たちにつねに新たな視野を与えてくださったのである。

本誌では、これまで長い間お世話になった宋文薰先生を偲んで、まず先生の生涯にわたるご研究を振り返り、さらにそれぞれの思い出を語ることにした。思い出を語る文章 4 編は、台湾で刊行された『人類学視界』の宋文薰先生記念特集号に本研究会のメンバーが寄稿した文章を、日本語版として収録したものである。これは台湾側の特集号を担当された黄智慧氏との連携にもとづく企画である。私たちは、宋文薰先生が自ら体現してきた台湾と日本との絆を、二つの雑誌を結ぶこのような形で示すことをもって、先生への追悼としたいと思う。

本書に収められた追悼文の初出は、以下の通り。

『人類学視界』No.19、《宋文薰先生紀念特輯》pp.6-15、台湾人類学與民族学学会、2016 年 8 月刊行。

清水純「回憶宋文薰先生」／笠原政治「宋文薰先生與台日学術界的連結」／黄智慧「心如春水柔——宋文薰先生與日本」／野林厚志「民族考古学的最佳理解者」

## 春水のごとく柔らかに

宋文薰先生と日本

黄智慧

(森若裕子訳)

宋文薰先生（1924-2016）は考古学の分野で台湾国内最高の評価を何度も受け、天皇陛下からの叙勲（旭日中綬章）の栄誉に浴した最初の台湾考古学者である。日本内閣府が発表した授賞理由は「日本と台湾の考古学分野での学術交流の促進」への多大な貢献であった。宋先生の学術交流への貢献はほぼ一世紀に渡る。

考古学、人類学、民族学は19世紀後半に発展した学問であり、こうした流れを受け、明治期に創設された東京帝国大学は設立後間もなく人類学講座を開設した。台湾はまさにこの新しい学問が真っ先に探究せんと欲する処女地であった。その人類学的な豊かさは、初期に来台した学者による調査の成果を通じて、日本の学会を驚嘆せしめた。台湾初の帝国大学として台北帝国大学が創立（1928年）された時、すぐに「土俗学人種学講座」が開設された。土俗学は英語で Ethnography といい、現在の民族誌、民族学、民俗学或は文化人類学といった学問の前身にあたる。この講座は他の帝国大学に先立って台北帝国大学に設置され、しかも同大学の特色を体現していた。この講座には教員と嘱託（卒業生）合わせてわずか3名が所属するだけであったが、極めて大きな戦力となり、他の分野（医学、心理学、史学、哲学、農学、社会など）の学者と共同研究や学会を開設し、雑誌を発行し、この学問を社会の各分野に広める役割を果たした。こうした画期的かつ優れた成果を積み上げていた講座であったが、残念ながら台湾出身の学生に門戸は開かれておらず、しかも日本人は敗戦後、引揚げてしまい、学術の継承は困難となった。

日本の敗戦により、宋文薰先生は東京（明治大学予科）から帰国し、台湾大学に進学した。奇しくも当時留用されていた国分直一先生が文学院副教授として招請され、宋先生は考古学を専攻し、国分先生の薰陶を受けることになった。国分先生は生まれた年（1908年）に台

湾に移り住み、台湾で育った。学業期（京都大学時代を除く）もずっと台湾の地で暮し、高校時代には先輩の鹿野忠雄に啓発され、台北帝大人類学の教授たちが行っていた発掘調査にも参加している。国分先生は事実上、この学術研究によって累積された貴重な知識の継承者であった。したがって、国分先生に師事した宋先生は、日本が50年かけて築いた考古学の礎の台湾人継承者なのである。

不思議な縁により、台湾で育った日本の「内地人」を通じて、台湾人に櫻が渡されたことを、青年時代の宋先生ははたして意識していただろうか。ある出来事からこの疑問を解き明かすことができる。卒業後、ただちに台湾大学考古人類学系の助教に就任した宋先生はその年（1951年）の暮れ、長い間北京で暮していた大学者の鳥居龍蔵が帰国するという知らせを目にした。深く「責任」を感じた宋先生は「鳥居龍蔵と台湾」の関係を、一般の人（特に「本省人」）に紹介すべく同題の文章を書き、『台灣風物』（第2巻2、3期、1952）に寄稿した。数年後、鳥居の長女幸子によって日本語に翻訳され、鳥居の回想録『手記』（付録）に収録されることになるとは思いもよらなかつただろう。鳥居本人も読んでいるにちがいない。面識はなくとも、図らずも台湾考古学創世記の先輩が黙って認めてくれたことは、学会に足を踏み入れたばかりの青年を感動させ、光栄の極みに導いたであろう。

このように時空と国境を超えて、先輩を敬慕する気持ちは、40年後（1993年）に鳥居龍蔵が100年前に撮影した大量のガラス乾板写真が発見された際、再び「鳥居龍蔵博士と台湾」という文章を書かれたことからも察することができる。その中で写真解説における問題点を指摘なさいっていた。数年後、馬淵東一と国分直一を論じた時にも、国分直一伝記の問題部分に言及しているように、見識の高い宋先生は、人の心の細部に至るまで見抜く確かな洞察力を持っていた。鳥居とその弟子森丑之助の関係についても鋭敏な洞察力でとらえておられた。森の残した文章「臺灣海峡から吹き送る風も何となく春の気分をそそる。……モー用意も整ふた。鳥居さんイザ水底寮へ歸らうか。」の行間から、森が海上で謎の死を遂げる前の絶筆であると宋先生は判読なさいている。

実は、この1993年の文章の翻訳を引き受けるまで、筆者は出身学部のこのような学術継承についてほとんど空白状態であった。しかし、宋先生御本人が筆者を翻訳者に選んだと知り、不肖ながらお引き受けするしかないという心境に至った。筆者が台湾大学考古人類学系に在学していた時（1978～1982）、ちょうど学部に大きな事業が舞い込んでいた。卑南遺跡の大規模な発掘調査が1980年から盛んに行われていたのだ。フィールドワークの履修が終了した時点ですぐに第4期と第6期の卑南考古学隊に編入され、炎天下での衝撃という洗礼

を受けた。その時、宋先生が考古学隊の隊長であった。小さな体で背筋をぴんと伸ばし、大勢の屈強な学生チームを大きな歩幅で先導していた。

台湾考古学を一から教えてくださった恩師の情を感じると同時に、宋先生が意識的に或は無意識に人類学史と日本文化の知識を教えてくださったことが思い出される。大学時代、先生の研究室で国分直一、宮本延人、三島格、姫野翠、未成道男といった学者の姿を目にして記憶している。また研究室には金闇丈夫と国分直一の写真が飾られており、それはまさに先生が学術研究を継承されていることを表していると言えよう。卑南遺跡の発掘中に、金子えりか先生が宋先生の大好物である辛子明太子（しかも福岡の「福屋」製と決まっている。）を携えて訪ねて来られたことがあった。王家の庭の木陰で宋先生はそのたった1つの小さな箱に詰められていた明太子を惜し気もなく自ら学生のお弁当箱に加えていった。この独特の異国の風味を味わうようにと。またお宅に伺った時、先生は奥様に何やら準備するようにおっしゃった。すると奥様は茶道のお点前を披露して下さったのだった。学生たちが抹茶の味を知ったのはこの時が初めてであったろう。

しかしながら、日本文化と共に愉しみ、先生の嬉しそうな表情が現われる時を除くと、学生の目からは先生はいつも厳格で軽々しいおしゃべりなどしない、何ともつかみどころのない方であった。この印象は日本に留学して3年が経つたある日一変した。たまたま先生が仕事で大阪を訪れた際、日本語を話せるようになっていた私は宋先生と日本語でお話しをする機会を得た。日本語での会話が進むうちに、私はふと気づいた。先生はもともとお話し好きで、ユーモアがあり、品格を重んじ、胸に情熱を秘めた方だったので！

私の心の中はひどく動搖していた。同じ人が、2つの言語を使うと、なぜ異なる人のように見えるのか。宋先生の心にはいつも日本と台湾二つの文化が共存しており、全く異なる文化の間で、先生は優雅に行き来していたのだろうか、それともしばしば葛藤していたのだろうか。異なる時代を生きてきた先人の心の内を、次世代の者たちが容易に理解し、感じられるはずもない。

逝去される数か月前、先生が文学青年だった時に好んで詠んでいた俳句（東京時代は著名な俳人の林原来井先生に師事されていた。）を探し出して、毎日、俳句の創作に打ち込んでいたことを奥様からうかがった。驚くべきことに、戦後70年経った今なお、先生は東京で遭った大空襲の炎が覆う空の記憶を思い起こし、敗戦国の国民としてその心情を描いているのだ。

今年2月に先生が詠まれた句は次のとおりである。

月見草 玉音放送 国滅ぶ

夏深し 国籍失う つけられる

亡くなる5日前には、予感があったようで、辞世の句を詠み、この世に別れを告げている。

初春の 水やわらぎて やもりなく

ヤモリは日本語では「家守」と書き、家の中に住み、その家の家族を守る縁起のよい動物とされている。ご臨終を前に宋先生は間もなく天皇陛下から叙勲を受ける名誉にあずかることをご存知だったらしい。おそらく思い残すことなく、春の水のごとく柔らかに心を解き放ち、「家守」と化して、先生が心から願っていた日華の平和の境地を見守っていらっしゃるだろう。